

博士論文

ジョルジョ・ヴァザーリと美術家の顕彰

——16世紀後半フィレンツェにおける記憶のパトロネージ

要約

古川 萌

16世紀イタリアの画家・建築家・著述家ジョルジョ・ヴァザーリ〔Giorgio Vasari: 1511-1574〕は、著書『美術家列伝』を執筆したことでよく知られ、同書はしばしば西洋美術史の出発点として位置づけられる。しかし、ヴァザーリの仕事は『美術家列伝』だけではなく、とくに1560年代以降は、フィレンツェ公コジモ一世・デ・メディチ〔Cosimo I de' Medici: 1519-1574〕のもとでさまざまな事業に携わった。本論では、ヴァザーリがおこなった諸活動をあらためて検討し、彼が打ち立てた「美術史」の根底にある儀礼的側面を浮かび上がらせることを目的とする。特に着目するのは、「美術家を顕彰する」という行為である。ヴァザーリはコジモ一世のためにおこなった活動を通して、美術家の顕彰にきわめて強い関心を持ち続けた。それは『美術家列伝』の執筆のみならず、アカデミア・デル・ディセーニョの創設、ミケランジェロの葬儀と埋葬、素描の収集など、多岐にわたる彼の活動全体を通して確認される。

ヴァザーリ自身の関心と文化的背景の詳細な検討を通して、亡くなった美術家をしかるべきやり方で埋葬し、追悼し、顕彰する行為が、一種のパトロネージと化していたことが理解される。ヴァザーリはその活動を通して、メディチ家の面々が、美術家に作品を注文する一般的なパトロネージ以外にも、美術家自身の顕彰によって歴史にその記憶を刻み込む「記憶のためのパトロネージ」をおこなっていたことを強調した。実践しているのはヴァザーリ自身であっても、その出資者として必ずメディチ家の名前を挙げ、彼らの営みに注意を喚起しているのである。つまり、ヴァザーリの諸活動における「記憶のためのパトロネージ」実践は、16世紀フィレンツェの文化的・社会的・政治的事情が複雑に絡み合う、きわめて重要な結節点にほかならない。

この「記憶のためのパトロネージ」を中心に、本論では、ヴァザーリが携わった活動のうち、美術家の顕彰に関わる要素を抽出し、それをヴァザーリに固有の文化的・社会的・政治的背景に照らしながら検討する。議論は以下のように構成される。

まず第一部では、『美術家列伝』と美術家のためのエピタフに光を当てる。エピタフとは美術家のための墓碑銘や追悼詩を指し、『美術家列伝』においては、収録された各伝記の末尾に記述された。第一章では、このエピタフの収集がどのような当時の文化に根差しているか検討する。ルネサンス期のイタリアでは、故人の墓前で追悼詩を詠唱したりそれを紙片に書いて墓石に貼り付けたりといった行為が、古代復興の一環として広く実践されていた。こうした文化を踏まえ、『美術家列伝』に収録された伝記の一つ一つが、美術家に捧げられた墓碑になぞらえられている可能性について論じる。

第一部第二章では、ヴァザーリが美術家のエピタフの収集と記述を、政治的戦略として利用している点について考察する。ヴァザーリの活動を、フィレンツェ公国、のちにはトスカーナ大公国を治めるメディチ家と切り離して論じることはできない。第一章で見たような弔いの儀式を踏まえたモニュメントとしての伝記もまた、フィレンツェ公コジモ一世とコジモ・イル・ヴェッキオやロレンツォ・イル・マニフィコといったフィレンツェ共和政時代のメディチ家とのつながりを示すための一手段であった。『美術家列伝』の記述を精査することで、共和政時代のメディチ家が、偉大な美術家が亡くなった際には丁重に弔った逸話を複数挙げて強調するとともに、コジモ一世もまた同様の事業にいそんでいる旨を記述し、二者の間に連続性を見出していることがわかるだろう。

続く第二部では、第一部で論じたような美術家の弔いと顕彰を組織的におこなった例として、アカデミア・デル・ディセーニョの活動を取り上げる。アカデミア・デル・ディセーニョ（以下、アカデミアと略記）はヴァザーリとボルギーニが中心となって創設された、素描芸術の推進を目的とする組織で、西洋世界における美術アカデミーの最初の例とされる。若い美術家の教育や仕事の斡旋といった活動でよく知られているが、その創立経緯をたどれば、美術家の埋葬と弔いが核となっていたことがわかる。そこで第一章では、アカデミア最初期の大規模な事業として、ミケランジェロの葬儀と墓碑建立を取り上げ、そのプロセスを検討することで、ヴァザーリのほかの事業との連続性を示す。

第二部第二章では、アカデミアが拠点と定めたサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂付属聖ルカ礼拝堂、通称「画家の礼拝堂」を取り上げ、この場所がいかに美術家の顕彰を行う場として機能していたかについて論じる。「画家の礼拝堂」の内部装飾のうち、とりわけ壁面に設置された彫刻群を、形式的な側面のみならずその機能においても考察することで、この場所がアカデミアの拠点であると同時にその核心を担う、物理的にも理念的にも重要な場であったことが浮き彫りとなるだろう。また、壁画装飾に描かれた美術家の肖像にも着

目し、その機能をさぐるとともに、モデルの選択がいかにおこなわれたかについて、一解釈を提示する。

最後に第三部では、美術家が遺したもの、すなわち作品について、ヴァザーリがどのような態度をとったかについて考察する。ヴァザーリは作品の展示について、一見すると相反する二つの態度をとっているかのように見える。この二つの態度をそれぞれの章で詳しく検討し、その本質に迫りたい。第一章ではヴァザーリがその展示について重要な役割を担ったと推察される「カリオペの書斎」を取り上げる。「カリオペの書斎」は、政庁舎にして君主の居城であったパラッツォ・ヴェッキオに複数存在した、君主のための小さな書斎のうちの一つである。ここには、コジモ一世のコレクションの一部である古代やルネサンス期の彫刻が収納・展示された。この書斎の展示について、ヴァザーリが著書『ラジヨナメンティ』に書き記した構想を手がかりに、特定の作品を同じ場で見せることによって、歴史的な文脈を可視化しようとしていた可能性について論じる。

第三部第二章では、ヴァザーリの素描コレクション、いわゆる「素描集」に着目する。素描を整理して冊子で保管するにあたって、ヴァザーリは素描を台紙に切り貼りしたり、貼り付けた素描に装飾枠を描き入れたり、素描への介入をためらわなかった。この描き入れられた装飾を見ると、ヴァザーリがその素描に与えた美術史上の位置づけを見て取ることができる。したがって、「素描集」は単なるコレクションではなく、実際の作品によって美術史を再構成する試みであったといえるだろう。しかし同時に、ヴァザーリは素描を、各時代様式のサンプルとしてのみならず、「美術家が手ずから描いて遺したモノ」としても尊重している。素描の周りに建築的な構造物を描きこみ、さながら聖遺物のように素描を扱うさまは、「素描集」をそれにふさわしい聖遺物入れとして浮かび上がらせるだろう。美術家を神格化し、その業績をメディチ家に帰する手法は、ヴァザーリのほかの活動とも一貫していた。

以上全六章の分析から立ち現れてくるのは、ヴァザーリによる美術家たちの生涯の記録は、結果的に「美術史」なる新たなジャンルを生み出すに至ったとはいえ、この行動はまづなによりも、同時代の儀礼や政治的背景に深く根差していたということである。したがって、本論は決してヴァザーリの画期的な試みを否定するものではない。そうではなくて、むしろそうした新しい美術史概念や文化的戦略を生み出した根底にこそ、伝統や儀礼があったのだ。

ヴァザーリの「記憶のためのパトロネージ」実践についての研究を通して、16世紀フィレンツェにおける美術家たちの死と記憶の問題に向き合うことで、ながらくヴァザーリを

「美術史の父」として称えながら呪縛してきた従来の言説から距離を置き、その諸活動を新たな枠組みでとらえなおすのが、本論のねらいである。